

## ご挨拶

病気を治療する場である病院と生活の場である在宅あるいは介護施設との間に何となく温度差を感じてしまうのはおそらく私だけではないはずです。ACPという言葉が広く言われるようになって久しいですが、延命に関することや終末期はどこでどのように過ごしたいのか、口に関して言うなら、どのような口で年老いていくのか、口から十分に食べられなくなったらどうしたいかなど、各職種で共有し寄り添ったかかわりができているでしょうか。患者は医療従事者、特に最後の頼みの綱である急性期病院の先生に対しては希望を言うと我儘と思われて嫌われるのではないかと思っている場合もあるようです。ある病院を退院する際に、言語聴覚士がとても丁寧に経口摂取の方法を指導し、文書提供もして下さっていました。入院中は可能でも、在宅ではベッドの角度を調整して姿勢を整え調整食を摂取という細かい指示は守られていませんでした。ご家族も仕事をしており、管理するのは難しかったようです。このようなケースでは歯科がそのつなぎ役となり、病院から提供された情報を踏まえながら在宅生活で実現可能な方法に落とし込むことができるのではないかと、また、患者の状況が変わったら病院と在宅でかかわる医療従事者同士が話をした方が的確な方針が決まるのではないかと感じています。

そこで、「医療と生活をつなぐー訪問歯科の役割と連携のあり方ー」というテーマで4人の方々に講演をしていただくことになりました。まずは大会長の山本から「歯科訪問診療のなかで思うこと」と題し問題提起いたします。病院での勤務を経て開業され在宅医療を中心にされている小林豊先生より「病院と在宅における食支援のギャップ～医師の視点から～」、三次救急の病院で退院支援看護師として勤務された経験をお持ちの濱野リカ先生より「病院と在宅をつなぐ退院支援看護師の役割」、食べる支援を精力的に行っておられる歯科衛生士の石黒幸枝先生より「在宅における「食べたい」とどう向き合うか～歯科衛生士が寄り添えること～」、病院や在宅への訪問診療を数多く行っておられる歯科医師の

坂井謙介先生に「医療と生活をつなぐ歯科訪問診療の役割～病院と在宅の視点の違いから考える～」の温度差を小さくするためには何が必要なのか、どうすれば解決するのかについてのお考えをそれぞれの立場からお話しいただく予定です。

生活の場で患者の思いに寄り添う歯科医療を行っていくうえで、病院との連携が有機的なものとなるヒントが得られることでしょう。多くの方々のご参加をお待ちしております。

病院歯科介護研究会 第28回総会・学術講演会

大会企画委員長 山本 道代  
(あいの里クリニック・歯科)